

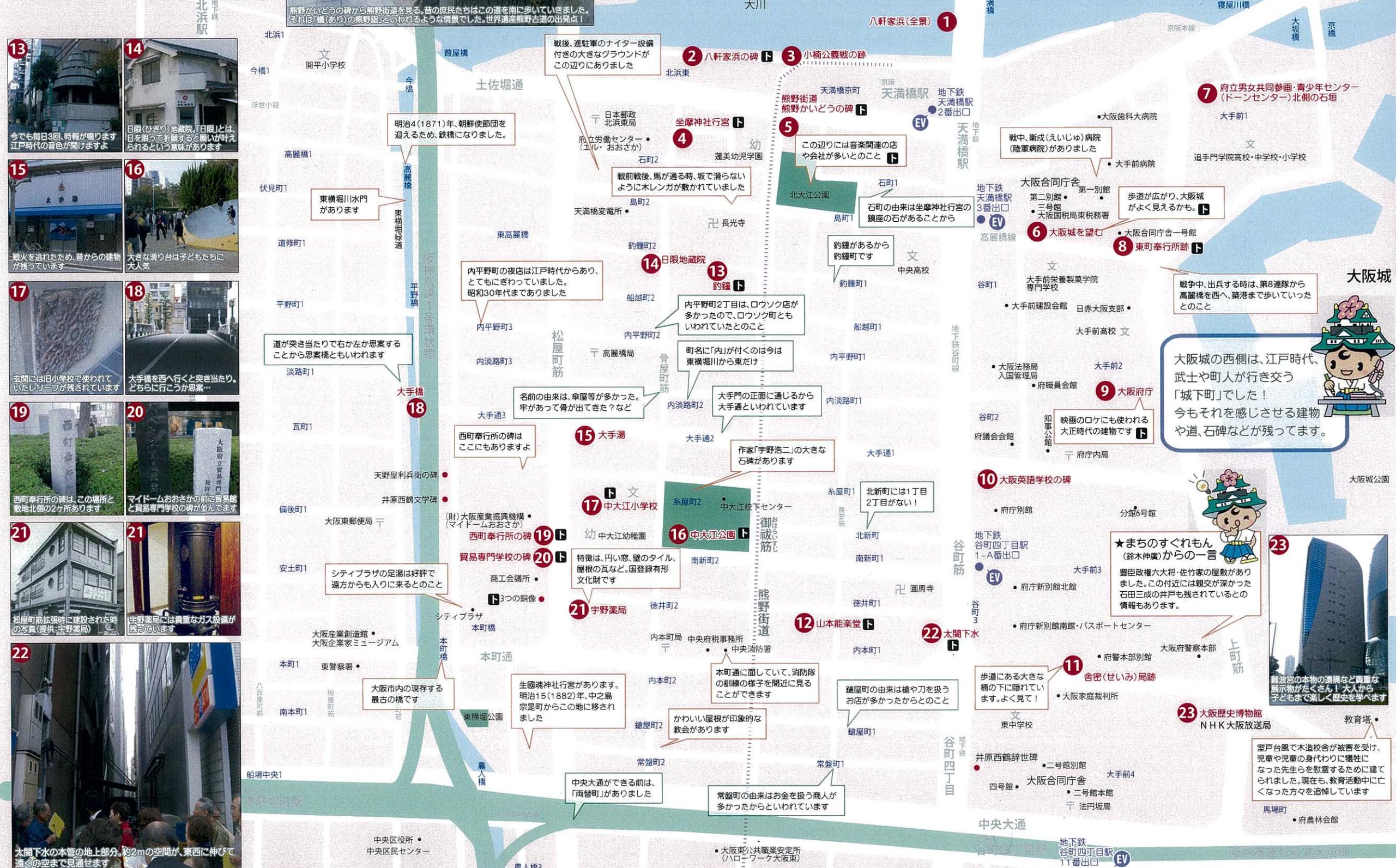
大阪市 中央区わがまちガイドナビ vol. 5

普通のマップとはひと味違う「ガイドナビ」誕生のヒミツ

「まちのすぐれもん」がご案内

「ガイドナビ」をご活用ください！

難波の発祥の地～大阪地区「北大江・中大江編」



受け継がれる城下町文化

難波の発祥の地～大江地区「北大江・中大江編」

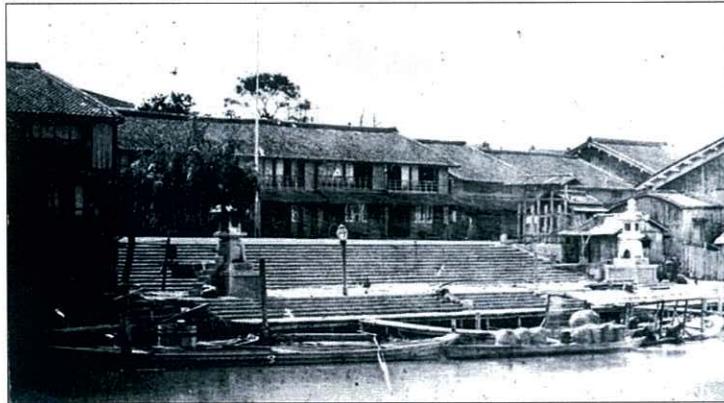
京都、大阪、そして全国へ 熊野街道の出発点

川から陸へと上がる熊野詣の起点の地は人と物が集まつた結節点。その歴史は石碑だけでなく、個性的な地名にも刻まれています。

大江の岸、渡辺の津、そして八軒家浜へ

「生國魂神社さんの北門付近に石製の大きな灯籠があります。その灯籠に、この地に宿屋が8軒あったことが書かれています。八軒家浜の名前の由来はここからきています」と語るのは、北大江で昆布店を営む八木さん（下写真）。八軒家浜は、近年、船着き場の整備やイベントが催されるなど、水辺のオアシスとして市民に親しまれる注目スポット。

でも、八軒家浜と呼ばれるようになったのは江戸時代に入ってきたこと。古来、この辺りは、生玉・天王寺方面に続く上町台地の西岸で「難波津」に面した「大江之岸」。平安時代頃からは「渡辺の津」とよばれ、摂津国の国府が置かれ、政治と交通の要になりました。



熊野街道は「蟻の熊野詣」でぎわった！

京都から熊野方面に参拝する際、淀川を船で下り、八軒家浜から陸路をたどることになります。15～16世紀には庶民による熊野詣が盛んになり、その光景は「蟻の熊野詣」と言われたほど、そろそろと熊野街道を歩んでいたとのことです。フィールドワークでは、天満橋京町3番にある「熊野かいどうの碑」で確認。その時に質問！「伏見から八軒家浜まで、下るのに何日、上のに何日かかったでしょう？」「半日？」3日間？」答えは…A「伏見から下るのに約1日、伏見まで上るのに約2日」かかったそう。

熊野詣最初に禊ぎをするのは、第1王子である坐摩神社行宮（※）。境内には、「鎮座の石」という大きな石がまつられており、神功皇后が難波津で帰る船を待っている間に座った石だそう。石そのものが坐摩神社のご神体で、「やわらかく座りやすい石」とのことです（※「ガイドナビvol.3 西横堀川をたずねて」を参照）。この石は、地名の由来にもなっています。坐摩神社行宮辺りは「石町（こくまち）」という名前です。

まちを歩いていくと、歴史の散歩道の舗装や、熊野街道の碑が見られます。御祓箭（おはらいすじ）とも言われた街道の熊野詣の情景が浮かんでくるかもしれませんね。



お城の正面「大手通」など由緒正しき町名

石町の他にも、城下町を感じさせる町名が残っています。元和5（1619）年、將軍秀忠により大坂の振興策として、伏見の町民に大坂への移住が命じられました。「伏見町」はその物語を伝えています。「錦屋町」も江戸時代、伏見の町人が移住し、もとは「伏見錦屋町」とよばれていました。「大手通」は大坂城大手門に通じることから、「平野町」は平野郷（現在の平野区）辺りから移り住んだと言われています。その他、江戸時代から残る地名として、「安土町」「淡路町」「本町」「備後町」「博労町」など、があげられます。

地名は当時の政治や暮らしを伝えるものとして、現在私たちが歴史をひもとくヒントを与えてくれます。

水都大阪のシンボルへ

難波津、渡辺の津の時代、「天下の台所」と呼ばれた江戸時代、そして「東洋のマン彻スター」と称した近代に至るまで、水都大阪のまちは、縦横に開削された堀川から、どれほどどの恩恵を私たちが受けたのかはかりしれません。川が育んだまち・大阪の歴史を見直し、今一度、水の都として再生する取組が始まっています。

平成21（2009）年、「水都大阪2009」が開催され、八軒家浜に巨大なアヒルが出現したことでも記憶に新しいでしょう。イベント以外でも、クレージングなどで、川から見たまちの姿を見、昔の熊野詣や水運のあつらしを思い浮かべながら、楽しむことができます。



かつての八軒家浜の様子。石船が行き交いにぎわった。三十七メートルの長さ。



耳寄りばなし 釣鐘町の巨大な釣鐘

釣鐘町の由来となった釣鐘は、現存しています。さて、釣鐘町にはどうして釣鐘があるのでしょうか？

冬の陣、夏の陣の戦災からの復興中の寛永11（1634）年、将軍家光が大坂三郷の地子銀（一等地）を免除する措置を取りました。今でいう経済特区のようなもの。釣鐘はその措置に感謝した町民が協力して造ったものなのです。明治3（1870）年、時報の役目をしていた鐘は、大阪城内から打ち出す号砲が始まると撤去され、転々とした後、府庁新築の際、屋上に移転。そして昭和60（1985）年、地元住民の協力や企業の寄付・協力を得て、釣鐘の里帰り運動の結果、元の釣鐘町に戻ってきました。

現在では、「時の記念日の餅つきや、大晦日の除夜の鐘など、地域のシンボルとしてまちを見守っています。

※【中央区史跡文化事典「大坂町中時報鐘」参照】



左▼なる歴史の散歩道の印

流れが強く舟が寄りつきにくかった「難波」の発祥の地。港町として歴史の始まったこの地は、技術、教育、文化などあらゆる面で時代をリードしてきた城下町でした。戦災、経済発展で街並みが大きく変わっても、脈々と受け継がれるものがあり、今も庶民の暮らしが営まれています。

人が集まり、人を育んだ 城下町を知る

時代をリードしてきた土木技術、教育施設、文化施設、遊興施設…。城下町に積み重ねられた財産を、今も垣間見ることができます。

町割りを今に伝える「太閤下水」

大阪のまちは、淀川・大和川の土砂で形成された平坦なデルタ地帯。雨水排水と多くの住人からの生活排水の処理が課題でした。東西横堀川に注ぐ下水網を建物の背中合わせになった場所に築いたことから「背割下水」ともよばれ、「太閤下水」は、升状の整然とした道路網とともにわが国の都市計画史上画期的なものとして評価されています。

現在でも、幅約2mの下水の上には建物が建てられておらず、フィールドワークでは、背割下水の上ではかなり遠くまで見通せることを確認。



太閤下水の説明する大浦さん。自宅にて替え工事の時には実物を見たとのこと

江戸時代の役所～東・西奉行所の変遷

奉行所は、役所と裁判所と警察署

元和5（1619）年、將軍秀忠は大坂を幕府直轄領とし、城主を置かず、大きな自治権を大坂に与える一方、大坂城を管理する城代や東・西奉行所を置きました。奉行所は今でいう役所と裁判所と警察署の役割を果たしていた施設。今は石碑しか残っていないが、大阪城の西側に当たるこの辺りは、昔からの官庁街で、まちを支える人たちが行き交っていたのは、今も変わらぬ風景です。

※詳しくは【中央区史跡文化事典「大坂町奉行所」】を参照】

大坂城の北側～東町奉行所

東町奉行所は大坂城京橋（現在の大阪歯科大学付属病院）辺りにありました。享保9（1724）年の大火で焼失しましたが、東町奉行所は元の位置に戻りました（右下図）。

商業の中心へ～西町奉行所

今の商工会議所は、西町奉行所があった場所。明治に入るとき奉行所は廃止され、「鎮台営所（軍司令部）」、「大阪府裁判所」となり、もなく「初代大阪府府」となりました。明治8（1875）年に府庁の建物を改修して、「博物館」が開場、明治17（1884）年には「府立大阪博物館」と改称されました。

その後、隣地を取り込み、明治21（1888）年に美術館、明治36（1903）年には、珍獣展示スペース（動物園）もつくられました。大正4（1915）年、天王寺公園の「市立動物園」が開業するまでの間、ここで様々な動物が見ることができていたことは、想像もつきません。動物園移転に伴い、そろは、この地から松屋町筋を歩いて天王寺に向かって歩いていったとのこと。

（右）（当時の写真）竹田さん提供



世界に羽ばたくビジネスマンを育成

商工会議所は、世界に羽ばたくビジネスマンを育成した「府立貿易専門学校」の発祥の地でもあります。戦後、不足していた貿易マンを養成するために昭和23（1948）年「府立高等貿易講習所」が開設されたことがきっかけ。ここから大阪を発展させていく商人が生まれたのです。この学校は現在の開明高等学校の前身。

また、商工会議所の敷地南側では、3体の立派な銅像が目をひきます。造幣局に通天閣、映画館。大阪の名所や、文化産業の生みの親なのです。

五代友厚

天保6（1835）年鹿児島生まれ。明治元（1868）年、新政府の外事局事務局に赴任。造幣局（元造幣局）の誘致や、今の大阪商工会議所の設立に関わる。

土居通夫

天保8（1837）年、宇和島生まれ。明治維新後、五代友厚の勧めで、大阪電灯会社を起こし、現在の関西電力に至った。大阪商業会議所の第7代会頭に就任。明治36（1903）年の第1回国際業博覧会の大坂説明、エッフェル塔視察後、通天閣建設と博覧会を成功に導いた。

人づくりを支える教育・教養施設が集まる

江戸時代、城下町だったこの辺りは、武士のたしなみとして、能楽が発展しました。現在も中央区には、「大坂能楽堂」と「山本能楽堂」の2つの能楽堂がありますが、これは大変珍しいことです。

大坂城があったことから、政府関連の施設が多いことも特徴の一つです。大阪府警察本部の南側には、日本初の理化学研究所「舍密局（せいみきょく）」が、現在の追手門学院には、「偕行社（陸軍幼年学校）」がありました。

現在、府庁の近くには日赤大阪支部、大阪法務局がありますが、そのような歴史を知れば、そうそうたる施設が集まるところも含め。

谷町2丁目交差点南東角には、「大阪英語学校跡」の石碑があります。ドーンセンター（府立男女共同参画・青少年センター）は、昔は大手前国民会館といわれ（毎日会館といわれた時期も）、市民の文化的な活動を発表する場でした。当時の様子を知っている方の話によると、和式トイレしかなかった時代に洋式トイレがあり、バレエの発表会が行われたり、当時としてはモダンな雰囲気が感じられたとのことです。

時代とともに建物が建て替わっても、まちとしての公的、教育的、文化的な育成機能は引き継がれていることがよくわかります。

府庁本館は映画のロケにも使われた名所

大阪城天守閣と対照するように建つ大阪府庁本館は、大正15（1926）年竣工で、現役の都道府県庁舎では最も古い建物。映画のロケにも使われている貴重な建物です。

松田優作さんの遺作となったアメリカ映画「ブラック・レイン」（1989年）や木村拓哉さん主演のドラマ「華麗なる一族」（2007年）、映画「HERO」（2007年）、NHKドラマ「白洲次郎」（2009年）など、多くの作品の舞台となりました。

平成23（2011）年初夏に公開予定の「プリンセストヨトミ」では、大がかりなロケが行われたとのこと。

※【中央区史跡文化事典「大阪府庁本館」を参照】

■「大阪ロケーション・サービス協議会」は平成12（2000）年に設立された日本初のフィルムコミッション。撮影協力した作品を中心に大阪のロケ地をホームページで紹介しています。観光やまち歩きなどの参考に一見の価値アリ！また、ロケ施設の紹介、撮影許可交渉の代行、ボランティアエキストラの募集などを行っています。

<http://www.osaka-fc.jp/>



後ろは大川。門は東（絵図右）の大坂城側に面しています。大坂東町奉行所絵図（一橋大学付属図書館蔵）

稻畠勝太郎

文久2（1862）年、京都生まれ。フランスから染料・染色機械を輸入し稻畠染料店（現「稻畠産業」）を始めた。日本の軍服をカーキ色にしたのは彼による。3度目の渡仏でシネマグラフの配給権の許可を得て、日本で初めて映画を上映させた。

土居通夫

天保8（1837）年、宇和島生まれ。明治維新後、五代友厚の勧めで、大阪電灯会社を起こし、現在の関西電力に至った。大阪商業会議所の第7代会頭に就任。明治36（1903）年の第1回国際業博覧会の大坂説明、エッフェル塔視察後、通天閣建設と博覧会を成功に導いた。

五代友厚

天保6（1835）年鹿児島生まれ。明治元（1868）年、新政府の外事局事務局に赴任。造幣局（元造幣局）の誘致や、今の大坂商工会議所の設立に関わる。

土居通夫

天保8（1837）年、宇和島生まれ。